

花と映画と私

中村 洋美

仕事の関係で、時々、花の卸売市場のセリを見学しています。いろいろな花を見ていると楽しくなり、セリの見学というより花の見学の面が強いかもしれません。花は、種類ごとにたくさんの色がありますが、季節やその時の入荷量により、色によって価格が決まることがあります。これも生鮮食品系の、需要と供給のバランスによるものなのではないでしょうか。

私は映画が大好きなのですが、映画の中でも花はいろいろと使われており、注意して見るようにしています。花の種類、色、どのように飾ってあるかなどと。しかし、意識しなくとも目に飛び込んできた映像がありました。「運命の逆転」で、主人公の側に飾ってあった緋色のグラジオラスでした。そのシーンは、婦人に非難されている主人公の心の中を映し出すように、グラジオラスを使ってありました。グラジオラスは、夏の暑いときに咲く、剣のような強いイメージの花です。しかも、燃えるような赤のため強烈な印象を受け、すごいと息をのみました。他にも、ホワイトハウスが舞台となる映画は、花を家具の一部のように不可欠なものとして使っており、素敵だなあと感じます。

また、「ニキータ」で、秘密工作員であるニキータに、元教官が花束とワインを持って訪ねて行くシーンがありました。この事に関して、花を贈るというエッセイを雑誌で読んだとき、どんな花束だったか思い出せませんでした。せめて色だけでもと思ったとき、映像にあまり色が付いてなかったように思えました。それを違和感なく見れたのは、音で色を付けていたからだと感じたのです。私が色の勉強をしてみたいと一番最初に思った、色と音の関係について、この映画では表現されていると感じました。

花は、映画の中で小道具の一つにすぎませんが、登場人物の服がTPOに応じて替わるように、その使われ方を見るのもおもしろいと思います。私たちの生活の中でも服を着替えるように、花を自然に、気軽に使えるようになったらいいなあと思っています。

色との出逢い

高木 くに子 中京短期大学

近頃は人々の色への関心も高まり、ファッションだけでなく、公共の色彩もニュースで取り上げられるようになったり、またカラーコーディネートという言葉が日常聴かれるようになりました。私も長年被服構成学実習の教鞭をとるなかで、デザインと色について関わってきました。1995年日本家政学会合同夏期セミナーで色彩部会に参加したことがきっかけで、日本色彩学会に入会しました。今ではファッション関連のみだけでなく、日常生活の中での色や地域と環境の中で氾濫する色をどう見るのか、見えるのか、また見られるのか学会主催の講演会を聴講し、いろいろな角度から色についての知識を私なりに深めております。

去年は、色彩文化の相違に興味を持ち、色との関わりをさらに広く持ちたいと『日本・韓国色彩学会研修交流会』に参加しました。通度寺・景福宮などの色鮮やかな建物、石宙善記念博物館・刺繍博物館では李王朝時代の上流階級の女性の礼服であったウオトサムやチョゴリ（襦）、チマ（裳）、また日本の風呂敷や袱紗の機能を持つ、絹紬仕立ての花蝶文様刺繍ボジャギやパッチワーク技法を施したボジャギなどにも、陰陽五行説に基づいた色を中心に伝統的色彩が随所に見られました。セミナーでは「古都」京都の景観に配慮した広告物の事例をあげて環境色彩についての発表、韓国の伝統色を基調とした服飾・建築における色彩についての発表などがありました。この短い4泊5日の学会研修会が色を再認識した、「色」との出逢いであり、色への関心を一層深めた旅でもありました。

いままでは街にあふれる広告や看板などの色・デザイン、それらをとりまく周りの風景を何気なく見過ごしてきましたが、近頃では広告や看板を始め、少し変わった外観や塗装などの建物が目につくようになり、今まで使ったことのなかった一眼レフカメラを片手に、「公共の色彩」をテーマに写真を撮っています。これを機会に色の持つ記号的役割の機能色と精神的役割の情緒色など色の感じ方を追求し、色とつきあっていきたいと思っています。